43

『熙載録』の鍼法

鶴田　泰平
日本鍼灸研究会

『熙載録』（天明2年［1782］刊）は江戸中期の医家・垣本鍼源の治験を鍼源の娘・茂登が記録編集し，また当時の医家で門人の梶川樹徳長卿が校訂した書である．

垣本鍼源は生没年未詳，本書の長卿序および茂登の凡例によれば，鍼源は平安の人．その治法は基本的に鍼（小鍼・大鍼・三稜鍼）を用いた鍼法および瀉血療法（刺絡）を行う．瘀血の多い場合は家伝の烟天散（煙天散）を服せしめて治療を行うが，これは常用ではなく，紅毛の術（西洋刺絡か）で時に使用する膏油や薬散は用いない．長卿は鍼源の術を「紅毛人に遠くして勝る」と記している．また，鍼源の常の言として「鍼治行うに必ず心を静かにし，慶賞爵禄を求めず，己の四肢形体を忘れ，腹診，背候診，寸口脈診のみでなく，審らかに手足の血絡を察して施術すれば治療を誤ることはない.」との記述がある．鍼源の没後は娘の茂登が後を継ぎ，善く業を為した．

『熙載録』は70例（72人分）の治験例を収録している．各例文は，患者の居住地・職業・名前・年齢等の情報に続き，病證，来所日，鍼源の所見，使用した鍼の種類と使用経穴名・施術部位，治癒年月日や治療期間，出血総量等が記されている．病證は，主に慢性化した久病例を収録し，急性病である「天行」「疫熱」「霍乱」「痢疾」「痧病」，小児の「驚癇」「痘疹」等の卒病例は「姑く置きて他日を俟つ」とし，本書巻末の「嗣出書目」にある「垣本先生卒病治験」と副題する『熙載録後編』に収録予定であったと思われるが，刊行は不明である．

この度は，鍼源の治法を考察する手掛りを得ることを目的として，『熙載録』の治験例の患者情報，病證，使用鍼と治療箇所，治療期間，出血量などについて調査した．

患者の居住は京都の地名が50例と最多で，北は越中から南は阿波，他に近江，浪華，摂池田，加州，濃州，尾州などの地名が見られる．患者の身分職業は，商人，農夫，武士，工夫，妓，婢，僧など多種に及ぶ．患者の年齢層は10歳以下から74歳で，40代15人，20代13人，30代12人が多い．病症名では，重複はあるが，「瘡」が18例で最多，次いで「疼痛」11例，「頭痛」6例と続く．収録の治験例は年代順に記されており，記載の来所日・治癒日によれば明和2年（1765）3月から明和8年（1771）9月の約6年半の間のものである．使用鍼は72人中は三稜鍼のみが33例と最多で，三稜鍼と小鍼併用21例，三稜鍼と大鍼併用14例，小鍼のみ1例，大鍼のみ1例，小鍼と大鍼併用1例である．薬剤使用は，煙天散が三稜鍼との併用で1例．灸は大鍼との併用（鍼名の記述無い文含み，三稜鍼併用の可能性大）が1例であった．また，登用の経穴・人体部位については，三稜鍼では患部への施術が39例と最多で，委中13例，尺澤12例，指頭9例と続き，小鍼では平均的で回数の突出した経穴・人体部位はなく，大鍼は，患部が7例と最多で，他の経穴・人体部位の施術は平均的である．治療期間は最短7日で最長約340日．出血総量は，最少は5勺（90ml）から，最大は1斗1升（19.8L）で，2升13例で最多，1升（1.8L）12例，3升8例，5升と2合が5例と続く．

これらの結果より，鍼源の治法は，①老若男女，貴賤貧富，病の種類・軽重に拘わらず，多種多様な患者を対象にしていたこと，②鍼以外の灸や薬剤の使用は極めて稀であったこと，③三稜鍼は他の経穴と比較して患部への施術がとび抜けて多く，ほぼ瀉血（刺絡）目的に使用していたこと，④小鍼は患部への施術は他の部位や経穴と差が無く，通常の刺法用であったこと，⑤大鍼は患部への施術がやや多くみられ，瀉血にも通常刺法にも用いる，三稜鍼と小鍼の中間的な使用をしていたこと，⑥三稜鍼の頻用箇所には患部以外に「委中」「尺澤」「指頭」等の特定の経穴・人体部位があったことが推測される．